

この時の建立と考えられるが、いつからどうしてここにあるか詳細がまったく不明である。(ただ梶原の姓からみれば今からおよそ五、六百年前、梶原源太景季の子孫が羽黒へ来たこと、そして村誌にもしるされているように、服部の家紋が梶原の紋と同じであり、この地に何等かの関係があったと思われる。)

(註) 寛保二年―西暦一七四二年

金助と
その母の碑
昭和四一年一〇月堀尾氏邸宅跡(八剣社境内)に建立されたこの碑には、天正一八年(一五九〇)小田原の合戦に豊臣秀吉の軍

にしたがって参加し、武運拙なく若い身でこの世を去った堀尾金助とその母の物語りが碑文に刻まれている。

金助の母は、金助の死後その三十三回忌に東海道熱田(現名古屋市熱田区内)の精進川にかかる裁断橋を修架し、供養を営むとともに橋の擬宝珠に子を思う母の思いを刻んだ。

銘文は、日本女性三大銘文の一つにかぞえられ、世に広く知られている。

ここ御供所は「金助とその母」の居住地といわれ、この遺徳を讃えるとともに、郷土の誇りとしてこの碑が立派に建立された。

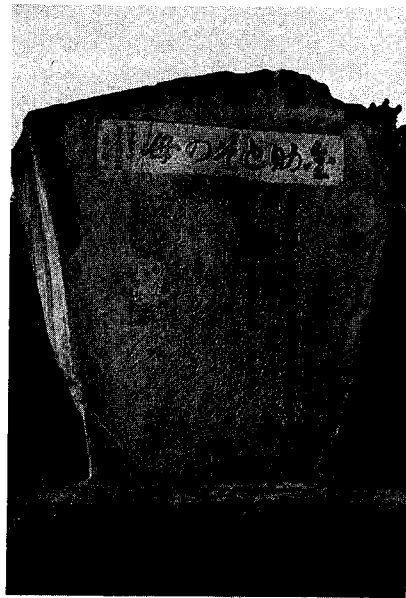


図4-40 金助とその母の碑

江戸時代の
道標

往昔より道標は数多く町内で見受けられたが、交通機関が発達した今日このような道標はあまり残っていないが。この自然石を利用した道標は、昔、小口^{サグ}地内を通る織田街道に小口村中組(現中小口)の住人近藤甚吉なる人が慶応三年(一八六七)に現在地より南西約二〇〇メートルの地に、旅人の道案内として建てたものである。

○現在地

大口町地内 県道斉藤羽黒線沿い兼房刃物工場東南角。

荒井の樋門

往昔、用水路の開削にともない木津用水幹線に多くの樋門が設置されたなかで、近代的な堅固な樋門の一つである。

灌漑期間中に、新木津用水路へ毎秒最大八トン。

合瀬川用水路へ六トン、五条川用水路へ三・五トンをそれぞれ分水する基点である。

木津用水幹線水路は、慶安元年(一六四八)に起工し、同三年に完工し、樋門は何度も改良が加えられ今日の立派なものになっている。

第四項 名 所

町内にはとくに観光施設、名所はないが近年、五条川堤の桜、尾北自然遊歩道が町民憩いの場として、大いに親しまれるようになっていく。

五条川堤の桜と尾北自然遊歩道

大口町地内

桜の名所

五条川堤

大口町を南北に流れる五条川は町内約七・二キロメートルの桜と尾北に及び、この堤防上の桜は三〇〇〇余本といわれ、この地

自然遊歩道

方一の桜花の名所となっている。

ソメイ吉野桜の並木は樹齡二〇数年をかぞえ、枝葉は旺盛となり、見事な花を咲かせる。

片側の堤防は、尾北自然遊歩道として完備され、春、秋の季節には町民はもとより、近郷の人々の花見、散策の場所としてにぎわっている。

なおこの川は昔から「幼川（雅川）」ともよばれ、昭和二八年に町内区域の改修工事が完工している。

第三節 古文書

豊かな自然や貴重な文化が高度経済成長の波にのまれて、多くが消失しようとしている今日、ふる里の歴史を見直し、これを保護しようとする力が大きく広がっている。

つきにかかげる古文書は、こうしたふる里の歴史発掘の参考資料として活用され、今後一層の考證がなされようと

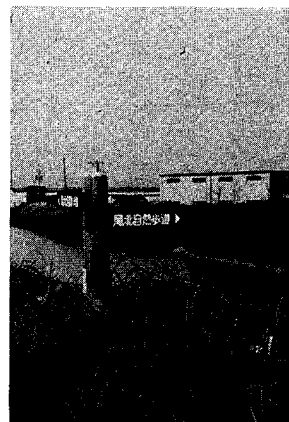


図4-41 五条川と尾北自然歩道

している。

大久地古事記

郷土の歴史は遠く一万年前にさかのぼるといわれているが、戦国の乱世、長祿三年（一四五九）に織田遠江守広近公が、稲置庄大久地村に城を築き（大久地城、別に箭筈城とも）、これまでの一寒村が一躍城下町を形成し、大きく発展し今日の「郷土大口」の礎となったことであろう。

この城のおもな家中の一人であった「酒井安芸守良隆」なる人がしるし、永く秘蔵したと伝わるのが「織田公御系図大久地古事記」である。

この古文書は、五〇〇有余年すぎた今日、酒井兼信宅（下小口）に秘蔵されていたとのことであり、全文を転写したものが、一宮市在住の酒井久美宅（もと下小口本郷に居住）と渡辺高一宅（下小口）に保存されている。

記述されている内容については、多くの異論もあるが今日考えてもかなり根拠がはっきりしていると思われるもの、あるいは面白い伝説的な項など豊富である。

全文に目を映すと、本町、各大字の起源、箭筈城の沿革などがしるされる一方、近藤、大塚の姓についても詳細にのべてあるが前述のように、史料価値については今後の研究・調査を待たなければならない。



図4-42 大久地古事記(写本)